

露頭の風景 写真家の視点

斉藤 麻子

今回の撮影場所は、つげ義春の代表作「ねじ式」の舞台にもなったといわれている千葉県鴨川市太海浜です。外房を望むのどかな集落には、迷路のように入り組んだ細い路地沿いに民家が立ち並び、鄙びた風情が今もなお残されていました。写真の中の階段を上ると、鳥居と津嶋神社と書かれた祠がありましたが、その由来とこの奇妙に残された露頭の関係について、残念ながら知ることはできませんでした。露頭は、全体ではなく部分的に不自然な形で岩が露出していることによって、かえって岩の存在感を出していました。また、コンクリートの壁から岩が迫り出てきてい

るようにも見えて、その様は「ねじ式」の作品の中で、民家と民家の間から突如蒸気機関車が出現した場面を思い起こさせ、非日常的な作品を追体験しているような気分になりました。この露頭の場所から目と鼻の先にある渡船場で船に乗り、仁右衛門島へと渡ってみると、さぞかしのどかな島だろうと想像していたのとは裏腹に、休日ということもあってか島は観光やバーベキューを楽しむ多くの人で賑わっていました。不思議な体験をしたのも束の間、また元の日常の世界へと戻ることとなりました。

地質屋の視点

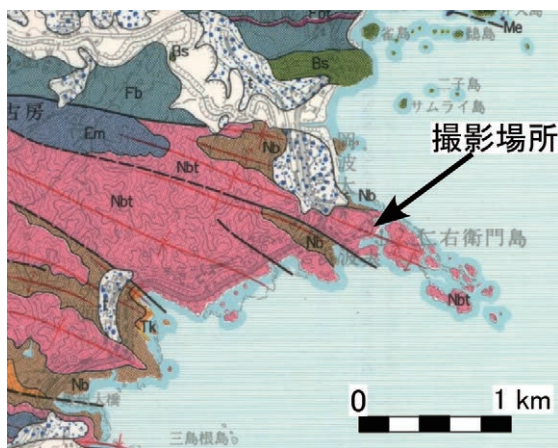
及川 輝樹

8月号は房総半島の内房側の露頭でしたが、外房側も地層を観察するには良い地域です。その外房側に位置する鴨川市太海の南、太海浜にこの露頭はありますが、人の手によって何とも奇妙な形に変えられています。太海浜は、沖合の仁右衛門島に渡る渡し船乗り場にもなっている港です。仁右衛門島は源頼朝や日蓮聖人の伝説で知られる島で、その島には写真の露頭と同じ泥岩を挟む凝灰質砂岩からなる地層が良く観察できることで知られています。写真の露頭を構成する地層は、5万分の1地質図「鴨川」では安房層群波太層と名づけられていますが、最近の研究では付加体であると考えられ保田ユニット（または保田層群）と名

づけられています。保田ユニットは、海の陸棚斜面ないし海溝にたまった砂や泥が、プレート運動によって押し付けられ、陸上に顔を出した地層です。この地層は、太平洋プレートの沈み込みにより、一度伊豆半島から伊豆七島をのせる島弧（伊豆-小笠原弧）に押し付けられた（付加）あと、再び本州側に押し付けられてつくられたものです。そのため、本来きれいな縞模様を描く地層が、切られ、折り曲げられ、激しく変形しています。写真の露頭付近の地層をつくる砂や泥がたまったのは、その中に入っている小さな生き物、放散虫の化石（微化石）から、約1800～1700万年前であることがわかっています。付加体などの変形が激しく形成過程も複雑な地層の理解には、放散虫などの微化石が大活躍しました。

文献

- 中嶋輝允・牧本 博・平山次郎・徳橋秀一（1981）鴨川地域の地質。地域地質研究報告（5万分の1地質図幅），地質調査所，107p.
- 斎藤実篤（1992）房総半島南部の新生界の層位学的研究。東北大地質古生物研報，93，1-37.
- 高橋雅樹（2008）3.3.2 南房総地域。日本地質学会編，日本地方地質地誌3 関東地方，朝倉書店，東京，175-187.



5万分の1地質図「鴨川」（中嶋ほか，1981）の一部に加筆。Nb，Nbtが波太層（保田ユニット）。